

Title	京大広報 No. 708
Author(s)	
Citation	京大広報 (2015), 708: 4349-4364
Issue Date	2015-02
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/202937">http://hdl.handle.net/2433/202937</a>
Right	
Type	Others
Textversion	publisher



# 京大広報

No. 708

2015.2



雪の大学構内風景

## 目次

### 〈巻頭言〉

監事監査の現状 監事 丸本 卓哉……4350

### 〈大学の動き〉

平成26年度京都大学体育会スポーツ表彰授与式  
を挙行……4352

平成27年度入学者選抜学力試験(個別学力検査)  
の志願状況……4353

平成27年度概算要求内示概要……4354  
各教育委員会との連携協定に基づく高大連携  
事業を実施……4356

### 〈部局の動き〉

宇治地区新年互礼会を開催……4357

### 〈寸言〉

順調に不調 川口 淳一郎……4358

### 〈随想〉

武士の商法 名誉教授 梶本 興亜……4359

### 〈洛書〉

物質文明の先にある未来 藤渕 航……4360

### 〈栄誉〉

中村和弘学際融合教育研究推進センター准教授  
が日本学士院学術奨励賞を受賞……4361

### 〈話題〉

日本学術振興会アジア研究教育拠点事業「リス  
ク評価に基づくアジア型統合的流域管理のた  
めの研究教育拠点」第4回包括シンポジウム  
を開催……4361

第7回次世代グローバルワークショップを開催  
……4362

経済研究所シンポジウム「22世紀に向けた政策  
課題と大学の役割 京都からの発信」を開催  
……4363

京都大学・日本財団森里海シンポジウム開催  
……4363

〈訃報〉……4364

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 巻頭言

## 監事監査の現状

監事 丸本 卓哉

## 1. はじめに

平成26年4月1日に監事に就任し、山口より京都に赴任しました。京都高校時代の修学旅行で3日程、また、学会で2度程訪れたことがあります。清水寺、金閣寺、宇治の平等院鳳凰堂のかすかな思い出が残っているだけで、方角さえ良く分からない状況でした。京都大学の監事への要請を受けたとき、研究者として若い時より抱いていた京都大学へのあこがれが、年齢的に時すでに遅しの感はあるものの、大きく思いだされました。

山口県(旧長州)は本州の西端に位置する小さな県ですが、京都とは歴史的、文化的に関係が深く、山口市は「西の京」とも呼ばれ、京都と同じ地名や神社、川や通りもあり、京言葉に近い山口弁(大内文化の影響)が残っています。規模は小さいですが、山口市も盆地であるため、気象も京都と非常に良く似ており、夏暑く冬は冷えるという状況です。

京都に来て早くも10ヶ月があっという間に経ちました。不思議と、遠くの他の街に来たという違和感はほとんどなく、隣の古都に来た感じです。ただし、京都は大都市であると同時に世界有数の観光地であるため、外国人や観光客が多く、山口市と比較にならない程、すべて規模が大きくて、今でも毎日が驚きと新しい発見の連続です。京都大学は山口大学に比べて約5倍、組織的にも予算規模も大きく、さすがに日本を代表する大学だと感心しました。

日本一の研究実績を誇る京都大学の監事としての仕事ができるのか、少し不安はありましたが、京都大学に関わる業務に携わることができるという関心が高く、引き受けることにしました。

3月末に前監事の江島義道先生から監事業務の引継ぎを受けましたが、その実状を理解するため、先ずは、過去4年間の第2期中期目標・中期計画期間中(平成22年～25年度)の監査報告書を精読し、何と



か理解することができました。就任以来、残っていた平成25年度の定期監査(5月～6月)と平成26年度の臨時監査(7月～12月)を実施してきました。現在、本年度の臨時

監査結果のとりまとめを行っているところです。平成26年度の定期監査は平成27年の3月～5月に実施し、最終報告書を6月末には提出することになりますが、ここでは、この10ヶ月間の監事監査の現状と私の感想をご紹介します。

## 2. 平成25年度の定期監査

平成26年の4～6月にかけて、平成25年度の定期監査を実施し、江島義道、奥正之の両監事による平成25年度の臨時監査の結果とを合わせ、6月末に平成25年度監事監査報告書を総長に提出し、文部科学省にも報告しました。

監事の役割と業務については、江島前監事が平成24年11月発行の京大広報No.683に具体的に述べておられますので、ここでは省略しますが、監事の主要な役割は、監事監査の実施によって、京都大学の業務の執行状況、会計・経理の状況等と課題を明らかにするとともに、大学の業務の改善と大学の価値の維持・向上に資するため、適法性および妥当性の観点より監事意見を述べることにあります。

本報告書は学内で公開されていますので、今後の業務改善の参考にするとともに、活用していただきたいと願っています。

## 3. 平成26年度の臨時監査

本年度の臨時監査のテーマおよびスケジュールに

については表に示すとおりで、7月～12月にかけて監査対象部局に出向き、監査を実施しました。

【平成26年度 臨時監事監査のテーマおよびスケジュール】

教育	高大接続の強化及び入試改善への取組	7～9月
研究	研究支援体制向上への取組とURAとの連携強化への取組	10～11月
業務運営	事務体制の変更に伴う事務の業務改善への取組	12月

教育に関するテーマは「高大接続の強化及び入試改善への取組」について、研究に関するテーマは「研究支援体制向上への取組とURAとの連携強化への取組」、業務運営に関するテーマは、平成25年度からスタートした共通事務部の設置に伴う「事務体制の変更に伴う事務の業務改善への取組」について監査を実施したところです。対象部局の関係者の方々による資料の準備と丁寧な説明に対し、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。12月中旬に臨時監査を終え、現在は監査結果のとりまとめを行っている状況です。

#### 4. 今年度における今後の監事監査のスケジュール

平成27年の1～2月にかけて、総長、理事、副学長の執行部の先生方に面談し、担当領域の年度方針について聴取するとともに、監査のフォローとして監事意見に対する取組状況を確認することと、監査対象部局に対し、監査方法、監査内容、監事意見等に関する意見を聴取し、出された意見を参考に、今後の監査に活かしていく予定です。

また、3～5月にかけて、平成26年度の定期監査を実施致しますが、関係事務部のご協力とご支援を切にお願いする所存です。会計監査については、監査法人と協力しながら監査を進めているところですが、3月頃の中間報告を得て、最終的には5～6月

に監査報告書をまとめる予定です。

#### 5. おわりに

ところで、政府および文部科学省では国立大学の法人化後、各種の法規が改善されたものの、国立大学内部の法規のいくつかは、旧国立大学時代のまま残っている場合があります。法人化後の国立大学の管理・運営にとって整合性を欠く部分があると、中央教育審議会の答申などで指摘をされ、平成26年8月には各国立大学法人に対して各種内規の見直しをするように通達がなされました。現在、総務部を中心に全学的な見直しの検討が行われています。平成27年4月には、内規等の総合点検、見直しの結果について調査が実施され、監事の所見を付することになっています。また、監事の役割や機能強化について、中央教育審議会で議論がなされ、従来の業務監査と会計監査に加え、大学のガバナンスや学長の業務に関する評価の付加、現行1期2年の監事の任期を次期監事より4年にする等の変更が実施される予定です。いずれにしても、国立大学法人をめぐる状況は、国からの教育・研究基盤経費の削減、グローバル化への対応、大学進学若年層の減少等の多くの課題を抱えており、当分の間は厳しい状況が続くものと思われます。

このような厳しい状況を乗り切って、輝かしい京都大学の価値の向上に資するため、監事として、微力ですが尽力する所存です。

みなさま方のご協力、ご支援を心よりお願いいたします。



## 大学の動き

### 平成26年度京都大学体育会スポーツ表彰授与式を挙げる

12月13日(土)、ホテル平安の森において、平成26年度京都大学体育会スポーツ表彰授与式を挙げるした。

このスポーツ表彰は、京都大学体育会規約にある「本会は、京都大学における体育の向上、運動の普及を図り、あわせて本学学生に心身の錬磨、品性の陶冶に資し、もって学徳兼備にして有為の人材を作することを目的とする」という理念を実践し、体育会活動に貢献した運動部員を表彰するものとして、平成19年度に設立されたものである。

優秀な成績を残した選手、大学から新たにスポーツに打ち込み実力を大きく向上させた選手、裏方として部を支えた選手・マネージャーを対象としている。

今回は体育会会長賞10名、優秀賞5名の計15名が表彰された。

表彰式では、小田滋晃 体育会会長(農学研究科教授)より表彰状・記念品が贈呈された。

#### 体育会会長賞(10名)

所属クラブ	氏 名
硬 式 野 球 部	上 田 遥
ラ イ フ ル 射 撃 部	大 友 健 郎
硬 式 野 球 部	小 野 翔太郎
ウインドサーフィン部	小 松 大 悟
水 泳 部	権 藤 大 平
水 泳 部	新 谷 健
居 合 道 部	田 代 大 知
硬 式 野 球 部	田 中 英 祐
弓 道 部	永 田 浩 章
アメリカンフットボール部	吉 村 隆 之

#### 体育会優秀賞(5名)

所属クラブ	氏 名
フ ェ ン シ ン グ 部	川 崎 晋 平
少 林 寺 拳 法 部	川 崎 美 樹
弓 道 部	北 村 裕 樹
フ ェ ン シ ン グ 部	近 藤 真 帆
馬 術 部	前 原 一 輝

(50音順)



体育会会長賞、体育会優秀賞の受賞者

(学務部)

## 平成27年度入学者選抜学力試験(個別学力検査)の志願状況

2月25日(水)から27日(金)に実施される平成27年度入学者選抜学力試験の志願状況は以下のとおりである。  
志願票の受付は、1月26日(月)から2月4日(水)まで、各学部で行われた。

学 部			募集人員	志願者数	倍 率	(参考) 前 年 度 最 終				
						募集人員	志願者数	倍 率		
総 合 人 間 学 部	前	期	120 <sup>△</sup>	412 <sup>△</sup>	3.4	120 <sup>△</sup>	454 <sup>△</sup>	3.8		
		文 系	65	231	3.6	65	207	3.2		
		理 系	55	181	3.3	55	247	4.5		
文 学 部	前	期	220	617	2.8	220	647	2.9		
教 育 学 部	前	期	60	195	3.3	60	203	3.4		
		文 系	50	148	3.0	50	159	3.2		
		理 系	10	47	4.7	10	44	4.4		
法 学 部	前	期	320	746	2.3	320	857	2.7		
経 済 学 部	前	期	230	649	2.8	230	719	3.1		
		一 般	180	424	2.4	180	485	2.7		
		論 文	25	100	4.0	25	106	4.2		
		理 系	25	125	5.0	25	128	5.1		
理 学 部	前	期	311	861	2.8	311	805	2.6		
医 学 部	前	期	250	677	2.7	250	673	2.7		
		医 学 科	前	期	107	328	3.1	107	326	3.0
		人間健康科学科	前	期	143	349	2.4	143	347	2.4
		看 護 学 専 攻	前	期	70	167	2.4	70	159	2.3
		検査技術科学専攻	前	期	37	104	2.8	37	99	2.7
		理学療法学専攻	前	期	18	39	2.2	18	39	2.2
		作業療法学専攻	前	期	18	39	2.2	18	50	2.8
		薬 学 部	前	期	80	201	2.5	80	232	2.9
薬 科 学 科	前			期	50	111	2.2	50	123	2.5
薬 学 科	前			期	30	90	3.0	30	109	3.6
工 学 部	前	期	955	2760	2.9	955	2867	3.0		
		地 球 工 学 科	前	期	185	409	2.2	185	379	2.0
		建 築 学 科	前	期	80	276	3.5	80	318	4.0
		物 理 工 学 科	前	期	235	796	3.4	235	777	3.3
		電気電子工学科	前	期	130	377	2.9	130	407	3.1
		情 報 学 科	前	期	90	321	3.6	90	341	3.8
		工 業 化 学 科	前	期	235	581	2.5	235	645	2.7
農 学 部	前	期	300	923	3.1	300	898	3.0		
合 計			2846	8041	2.8	2846	8355	2.9		

(注1) 法学部と経済学部(一般)の募集人員は、外国学校出身者のための選考各10名以内を除く。

(注2) 工学部地球工学科の募集人員は、外国人留学生を対象とした国際コースのための選考による入学手続者14名を含む。

(注3) 工学部の学科別志願者数は、第1志望学科の数を示す。

(学務部)

## 平成27年度概算要求内示概要

## 新規要求

1. 医学研究科 医科学専攻 外, 農学研究科 農学専攻 外 修士課程 40人  
博士課程 4人
2. 特別経費  
特別経費として新規6件, 継続42件の事業が採択された。

部 局 名	事 項 (事 業) 名	新規・継続・更新の別
【プロジェクト分】		
①国際的に卓越した教育研究拠点機能の充実		
文学研究科 経済学研究科	世界最高峰の現代アジア・日本研究の教育研究拠点形成 －京都大学アジア研究クラスターと国際連携大学院プログラム－	継続
理学研究科, 工学研究科, アジア・アフリカ地域研究研究科, 生存圏研究所, 防災研究所, 事務本部(総務部(学際融合教育研究 推進センター))	宇宙開発利用を担うグローバル人材育成のための宇宙学拠点の構築	継続
医学研究科 医学部附属病院	ヒト試料・情報を活用する研究環境および高度国際人材育成モデルの構築事業	新規
医学研究科	次世代人材育成を目指す生命科学研究基盤整備事業 －バイオ・フロンティア・プラットフォーム－	継続
薬学研究科	化学・生物学分野融合による価値創造型創薬研究拠点の構築 －薬・工・医連携創薬テクノロジーイノベーションプロジェクト－	新規
iPS細胞研究所	iPS細胞研究拠点形成事業 －iPS細胞の臨床応用に向けた取り組み－	継続
②高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実		
法学研究科	グローバル化に対応した今後の法学教育を支える実定法研究者養成拠点の形成	継続
法学研究科	法学・政治学を基盤とするグローバル人材養成強化事業	継続
アジア・アフリカ地域研究研究科, 東南アジア研究所, 地域研究統合情報センター, アフリカ地域研究資料センター, 事務本部(研究国際部)	変貌するアジア・アフリカで活躍するグローバル人材の育成 －国際臨地教育プログラムの開発と実践－	継続
④大学の特性を生かした多様な学術研究機能の充実		
医学研究科	ゲノム医学による先制医療に向けた基盤構築事業 －ながはまモデルによるゲノム・環境情報統合研究コンソーシアム－	継続
農学研究科 薬学研究科	食と健康の生理化学の創生 －農・薬連携によるライフ・イノベーションプロジェクト－	継続
医学部附属病院	最先端がん医療開発プロジェクト －がん克服に向けた医療開発を加速させる研究支援環境強化－	継続
教育研究組織の再編成等を見据えた構想プロジェクト		
事務本部(総務部)	京都大学教育研究組織改革実行プロジェクト －世界競争力のある国際総合大学を目指して－	継続
【全国共同利用・共同実施分】		
化学研究所	化学関連分野の深化・連携を基軸とする先端・学際研究拠点形成	継続
人文科学研究所	人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点	継続
再生医科学研究所	再生医学・再生医療の先端融合的共同研究	継続

部 局 名	事 項 (事 業) 名	新規・継続・更新の別
エネルギー理工学研究所	ゼロエミッションエネルギー研究拠点形成	継続
生存圏研究所	生存圏科学ミッションの全国・国際共同利用研究拠点形成	継続
防災研究所	自然災害に関する総合防災学の共同利用・共同研究推進事業	継続
基礎物理学研究所	基礎物理学の発展を目指す大学横断型全国共同研究	継続
ウイルス研究所	ウイルス感染症・生命科学先端融合的共同研究拠点事業	継続
経済研究所	先端経済理論の国際的共同研究拠点	継続
数理解析研究所	基礎数理共同研究の推進	継続
原子炉実験所	複合原子力科学の有効利用に向けた先導的研究の推進	継続
霊長類研究所	霊長類研究を基にした国際共同研究拠点の推進	継続
東南アジア研究所	東南アジア研究の国際共同研究拠点	継続
放射線生物研究センター	放射線生物学の研究推進拠点	継続
生態学研究センター	生態学・生物多様性科学における共同利用・共同研究拠点の形成	継続
地域研究統合情報センター	地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進	継続
野生動物研究センター	絶滅の危機に瀕する野生動物(大型哺乳類等)の保全に関する研究拠点	継続
【全国共同利用・共同実施分(従来のプロジェクト分)】		
化学研究所 エネルギー理工学研究所 生存圏研究所	グリーンイノベーションに資する高効率スマートマテリアルの創製研究 －アンダーワンルーフ型拠点連携による研究機能と人材育成の強化－	新規
化学研究所	統合物質創製化学推進事業 －先導的合成の新学術基盤構築と次世代中核研究者の育成－	継続
再生医科学研究所 ウイルス研究所	臓器新生のための基盤技術開発研究拠点 －組織再生技術のイノベーションの創出－	継続
エネルギー理工学研究所	革新的高効率太陽光利用技術の開発 －ゼロエミッション文明への変革を加速する－	継続
ウイルス研究所 霊長類研究所	新興ウイルス感染症の起源と機序を探索する国際共同先端研究拠点	継続
経済研究所	先端政策分析研究推進事業 －イノベーションの創出・活用により豊かな国民生活を実現する新経済社会システムの構築－	継続
数理解析研究所	最先端数学の研究力を強化する新しい幾何学の創造 －数学における主導的地位の確立－	継続
原子炉実験所	原子力利用を支える新しい安全基盤科学の構築 －研究炉の活用による「包括的な原子力安全基盤科学研究と人材育成」－	継続
霊長類研究所	人間の進化の霊長類的基盤に関する国際共同先端研究の戦略的推進 －人間の本性と心の健康を探索する先端研究－	継続
東南アジア研究所	ライフとグリーンを基軸とする持続型社会発展研究のアジア展開 －東アジア共同体構想を支える理念と人的ネットワークの強化－	継続
野生動物研究センター	絶滅危惧野生動物保全研究の推進プロジェクト	継続
【教育関係共同実施分】		
フィールド科学教育研究センター	黒潮海域における海洋生物の自然史科学に関するフィールド教育共同利用拠点の整備	継続



部 局 名	事 項(事 業) 名	新規・継続・更新の別
フィールド科学教育研究センター	日本海における水産学・水圏環境学フィールド教育拠点形成事業	継続
【国立大学機能強化分】		
国立大学機能強化分(具体的な構想は下記のとおり)		継続
・京大グローバルアカデミー構想 ～我が国のグローバル化エンジンの機能を目指して～		
・京都大学研究連携複合基盤(仮称)構想		
【機能強化関連プロジェクト分】		
京大グローバルアカデミー構想		
情報学研究科 事務本部(総務部(学際融合教育研究推進センター))	学部・大学院共通情報教育の革新と教育情報化によるグローバル人材の育成	継続
地球環境学堂，工学研究科， 農学研究科，人間・環境学研究科	海外サテライト形成による ASEAN 横断型環境・社会イノベーター創出事業	新規
高等教育研究開発推進センター	ICT(情報コミュニケーション技術)を活用した教育の国際化とエビデンスデータに基づいた教育改革のための支援基盤強化	新規
京都大学研究連携複合基盤(仮称)構想		
各研究所・センター	京都大学附置研究所・センター群の連携強化によるイノベーション創出プロジェクト	新規
特別経費 計	48 件 [内 訳 新規 6 件] [ 継続 42 件]	

### 病院特別医療機械設備(財政投融資設備)

部 局 名	事 項 (事 業) 名	新規・継続・更新の別
医学部附属病院	生体情報監視システム	更新
医学部附属病院	感覚器総合診療システム	更新
医学部附属病院	外科総合診療システム	更新
医学部附属病院	総合リハビリテーションシステム	更新
医学部附属病院	内科総合診療システム	更新
医学部附属病院	超音波・内視鏡画像検査システム	更新
医学部附属病院	全身用 X 線 CT システム	更新
医学部附属病院	診療支援高度生理機能検査総合管理システム	更新
病院特別医療機械設備 計	8 件	

(財務部)

## 各教育委員会との連携協定に基づく高大連携事業を実施

本学は大阪府、滋賀県、京都府・京都市、和歌山県教育委員会と連携し、高等学校における自律的・探究的学習の充実と、高校生が多様な学習機会を提供することを目的として、12月13日(土)、18日(木)、20日(土)に各地でさまざまな事業を行った。普段接することのない学びの世界に触れ、視野を広げる一助として今後も取り組みを強めていく。各教育委員会ごとの主な事業は以下のとおりである。

### 【大阪府】

GLHS(進学指導特色校)10校とともに「京都大学キャンパスガイド」を百周年時計台記念館で開催。代表生徒による研究成果発表、本学教員による講評、明和政子 教育学研究科教授および山下 潤 iPS細胞研究所教授による講演、各学部の協力のもと学部紹介や模擬授業を実施。



高校生によるプレゼンの様子(大阪府)

### 【和歌山県】

「和歌山県高等学校生徒科学研究発表会」を御坊市

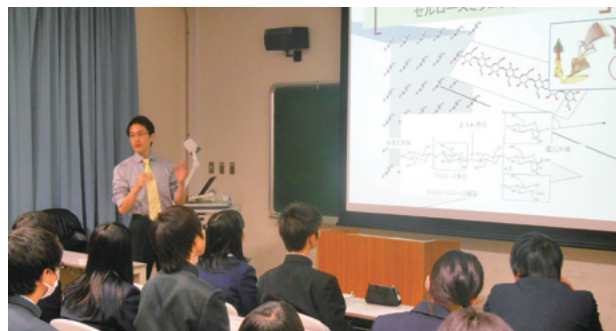
民文化会館で開催。午前は代表校による研究発表やポスターセッションを実施し、午後は、江口浩一 工学研究科教授による講演「エネルギーと環境の科学－燃料電池と触媒－」を実施。

### 【京都府・京都市】

「京都大学ウィンターミーティング」と題して、百周年時計台記念館で開催。代表3校による生徒発表のあと、楠見 孝 教育学研究科教授による講演「グローバル社会を生きるための批判的思考力－探究学習から研究、社会的問題解決へ－」を行うとともに、学生による学生生活の様子や学部紹介も実施。

### 【滋賀県】

「滋賀県研究発表集会in京都大学」を吉田キャンパスにおいて開催。代表生徒による研究発表、鈴川由美 学際融合教育研究推進センター特定研究員による基調講演、大学院生等による講義を実施。



堀川祥生 生存圏研究所特定研究員による講義  
(滋賀県研究発表集会in京都大学)

(学務部)

## 部局の動き

### 宇治地区新年互礼会を開催

宇治地区では1月5日(月)、宇治おうばくプラザ ハイブリッドスペースにおいて新年互礼会を開催した。宇治キャンパス各部局の連携促進と構成員間の交流を深めることを目的に毎年開催されており、各部局の教職員に加え、事務部職員も加わり、宇治地区の一体感をより高める機会となっている。

開会にあたり、宇治地区世話部局長の岸本泰明 エネルギー理工学研究所長より新年の挨拶があり、続いて、次期宇治地区世話部局となる防災研究所から、大志万直人 同研究所長の発声による乾杯があった。

その後、出席者は銘々に歓談し、新年を迎えた実感と賑やかな雰囲気の中で盛会のうちに閉会となった。



新年の挨拶を述べる岸本所長(左)、乾杯の音頭をとる大志万所長  
(宇治地区事務部)

## 寸言

## 順調に不調

川口 淳一郎



およそ15年間、結果として、私の人生のなかで大きな存在となった、探査機「はやぶさ」。満身創痍の「はやぶさ」の帰路、私は、こう描写した。宇宙機の運用は、腫れ物をさわるかのよう。予め作業内容を作成し、復唱・確認し、その手順書に則って行われるのがきまりである。しかし、「はやぶさ」では、既定の、標準の運用手順はあてはまるはずもなく、否が応でもルールを超えなくてはならなかった。

夏目漱石の『草枕』の冒頭は「意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい」で始まる。日本は不思議な国である。

エレベーターには、おびただしいほどの注意書きが貼りまくられている。喚起されるルールが多いほど安全と思いがちである。飛行機に乗ると繰り返しアナウンスされる膨大な注意事項。日本人は、知らず知らずに、ルール漬けにされている。

大震災の後、まったく暴動が起きなかった。世界がこれに感嘆した。被災者がリレーして物資を運び、我々よりも向こうの人たちを先にと指をさした。私たちは、これを誇りに思う。しかし、被災した民衆はじっと政府の指示を待ち続けた。自らを枠に入れている象徴でもある。

かつて、ゆとり教育の中で生まれた信じられない運動会があった。「一緒に手をつないでゴールさせる」、「足の速い子が勝つとわかっている競技はやめさせるべきだ」。日本は、もっとも成功した社会主義の国とも言われる。ルールや規制を全うするのが本務、生涯をかける仕事だと誤解する人が続出する国でもある。

「はやぶさ」でも信じられないことを経験した。着陸機ミネルバをイトカワに投下しようとした前夜に電話がかかってきた。「まさか電波が出るわけじゃないでしょうね。イトカワでの電波の申請はしましたか？」幸い微弱なカテゴリの中にあり適合していたが、使われる天体が違うのだから、ルールの一様な

適用は不合理のはず。「はやぶさ」が地球に帰還する前には電子メールがきた。「はやぶさ」に与えた電波の免許は、深宇宙での免許だ。月の内側では電波は出さないですね」。確認しようとして、はたして、どんなプラスがあるというのだろうか。近距離では絞って運用すればよいだけのこと。出さないと確認・徹底しようという行動は不可解だ。

最初は、いろいろな活動を囲むように、包絡して、法律、ルール、ガイドラインなどの規制が作られる。しかし一旦できてしまうと、全ては規制の内側で考えはじめなくてはならないと強制され、またそれが当然と受け入れてしまう。おそろしく残念な国民性がここにある。

人間の行動とは不合理なもの。だが、その不合理さは、時として、植えつけられてしまうものらしい。かつて日本を戦場へと導いた全体主義もそうだ。あたかも、それが美德として描かれ、不合理を完璧なまでの合理性へとすり替えていく国民性。ルールの遵守がライフワークに映るのも、そのせいだろう。

伝統的な経済学では、個人は、自己の満足度を最大にせんと投資に向かうとされるが、日本では、圧倒的に貯蓄に向かい、理論はあてはまらないようだ。ここでも、世界でもっとも成功した社会主義と言われる。

完璧なまでの不合理の正当化。日本では、これが災いしている場合が非常に多いのではないだろうか。

新しいことをするならば、まず、規制がなかったとしたら、そして、不合理かもしれないその方法を疑ってみて、何ができるかを考えてみるべきだ。

京都には、それができるかもしれない。大学の街だからか。自分で考える、拓くという考え方が、いわば自動的に育まれ、そして組み込まれている。街は小さくてどこへでも歩ける。議論を向ける相手がそこに居る。何時であろうと、それを阻むものもない。深更までの議論もザラだ。私も大きく影響を受けた。東京遷都が、政治と隔絶した学風を築いたのかもしれない。イノベーション、京都にその発信を期待したい。

(かわぐち じゅんいちろう 宇宙航空研究開発機構(JAXA)シニアフェロー、宇宙科学研究所教授 昭和53年工学部卒業)



## 随想

## 武士の商法

名誉教授 梶本 興亜



退職の数年前から、全学共通教育(1, 2 回生教育)の化学部会に関わるようになり、「2006年問題」を知った。「ゆとり教育」の完成を目指す文部科学省の「新学習指導要領」に基づいて教育された、基礎的知識の少ない学生さん達が2006年以降に入学してくるという問題である。彼らをどのように教育すべきか、全学の先生方と、泊まりがけのワークショップで討論した記憶がある。当時、全学共通教育の「化学」の授業も数年間参加させていただいたので、2006年を待たずとも、すでに学生さん達の学習意欲が減退していることは肌で感じていた。

そんな体験の後に退職したので、退職後は「初等中等教育」にシフトして新しい活動を始めたいと思っていた。特に、小学校・中学校・高等学校で生徒達を教える先生方の意欲の減退が、生徒達の意欲減退の原因ではないかと考え、先生方の活性化に力を注いでみようと思った。先生方の再教育の場である「大阪府教育センター」で非常勤的にお手伝いをすると共に、退職金をはたいて家にプレハブを建てて教育ボランティア「けやきの会」を立ち上げた。このボランティアでは、年2回先生方や保護者の方々を対象に「教育講演会」を開き、教育の問題をやや高い包括的な視点から考えていただくという企画を立てた。その世話をして下さる同志の方々も10数名集まって、教育の問題点や、我々に何が出来るかを話し合った。

最初は学力低下問題が中心であったが、教育について話し合うにつれ、いじめ問題、ITの問題、不登校の問題、多忙すぎる先生方の問題、モンスターペアレント問題、経済格差と教育格差の問題など、次第に学校環境・家庭環境・社会問題が話の中心になった。学力問題を越えて、このように問題が拡散

し大きくなってくると、比較的年齢の高かったボランティアメンバーの活力では、そこに飛び込んで活動することはかなわなくなってくる。講演会も、忙しい現役の先生方や子育て世代の参加より、余裕があって評論の得意な退職世代が中心となってしまう、当初のもくろみとは異なる結果になった。そして、開始から10年を経て、教育ボランティア活動は休止することとなった。結局は「武士の商法」であったと言えるべきであろう。現実には、高みから見ているほど単純ではなく、先生方は学力以外の問題でヘトヘトになっていた。加えて、文部科学省や首長から学力に関しても様々な注文が出される。彼らの出す注文も「武士の商法」的発想のものが多く、現場にはいい迷惑である。教育のための時間がどんどん削られている。

それでも、私が始めた先生支援の活動で、今も好評を得ている企画も無いわけではない。大阪府教育センターでの先生方の「半年理科研修」のお手伝いでは、先生方が半年を経て、見違えるような理科好きになれるのを見ることが出来る。また、大学の友人の先生方に来ていただいて開く「理科サロン」には、いつも多数の先生方が出席して下さる。「最先端の話を易しく」という趣旨でお願いすると、実に魅力的な話を聞かせていただけることが多く、小学校から高校まで現場の先生方にはとても人気がある。この随想を読んで下さっている先生方にも、そのうちご迷惑をおかけするかも知れない。また、寄附を集めて、先生方の個人研修や研修会出席の交通費を援助する活動も、実質的なお役に立っている。「武士の商法」も一部はものになったのではないかと自分を慰めつつ、今暫く活動を続けたいと思っている。

▼教育ボランティア「けやきの会」ホームページ：

<http://www.keyaki.kjmt.jp/>

(かじもと おきつぐ 平成18年退職、元理学研究科教授 専門は物理化学－化学反応・分子分光・クラスター化学など)



## 洛書

## 物質文明の先にある未来

藤 渕 航

以前、「○○のこんなもの  
要らない」という番組があっ  
たが、最近、身の周りにある  
器具で首を傾げることが  
度々ある。東京消防庁のWeb  
ページによると平成22年から  
25年までの4年間でスマート  
フォン等に係る事故により



122人が救急搬送されたと報告された。日本は文明  
開化と共に積極的に欧米の物質文化を取り入れてき  
た。今も尚その傾向は強まり、大量販売を助長する  
資本主義と合流して、物質依存の最盛期を迎えてい  
る。確かに、ガス灯や蒸気機関車が発明された頃  
には、恐怖心や不便さを取り除くその有り難さに感動  
し、戦後の復興では物質文明の豊かさに感涙したと  
は思うが、回転ドアに挟まれて亡くなられた子供の  
ことを考えると無作為に便利さを追求する器具を開  
発し続けることが必ずしも良策だとは思えない。し  
かし「要」と「不要」の線引きが難しいのは事実でも  
ある。

先日、映画「サロゲート」を鑑賞する機会を得た。  
近未来で身代わりロボットが社会生活を代行し、人  
間は自宅からサロゲートを遠隔操作するのでロボッ  
トに何が起ころうとも安全を確保できるという。し  
かし、反対に人間は自宅から出ることがなく、自信を  
無くし、生身の社会生活を送ることができない「引  
きこもり」が多発していた。そしてサロゲートの反  
対派が結成されてサロゲート企業と争うという何と  
も恐ろしいストーリーである。笑えないのは、既に  
現在でもアメリカ東部にアーミッシュと呼ばれる電  
気や自動車など近代文明を使用せず、自給自足の生  
活をしている人達がいることで、実際に起こりうる  
可能性が高い。

私自身を例にとると、若い頃には電灯に強く依存  
した夜更かしや、ビタミン剤、冷暖房に依存するい  
わゆる「文明的」な生活をしてきたが、自律神経が衰  
弱して不眠症に陥り、通常の日常生活が営めないほ  
ど体調が崩れてしまったことがあった。ある時、生

命の危機を感じたことをきっかけに、試しに過度の  
文明依存をやめ、朝は日の出と共に起床し、夜は月  
明かりの様な黄色電灯だけで早寝を励行した。また、  
玄米に味噌汁を食み、茶をよく飲んで、自宅では椅  
子ではなく畳に座り、出かけるときは和草履を履い  
た。寒い冬に寝る時もエアコンではなく、湯たんぽ  
に切り替えた。また、武道や書道を始めた。つまり、  
つい戦前まで行ってきた日本人の生活スタイルを実  
践してみたのである。それぞれの効果について詳細  
は割愛するが、これは驚くほど功を奏して自律神経  
は完全に回復すると同時に、何と視力まで戻って記  
憶力や判断力が増し、結果として良い仕事を依頼さ  
れる機会が増えた。

この時覚えた格言が「地獄への階段は善意の石で  
敷き詰められている」である。現代社会は全くその  
感がしてならない。また、有史以来のテーマである  
「物質世界と精神世界のバランスはいかに取ればよ  
いのだろうか」と考えるようにもなった。日本では  
強く澄んだ精神性を育むため、長い歴史を経て開発  
されてきた多くの「道(どう)」がある。これらが一度  
は戦後の占領政策によって禁止されたことから日本  
人の持っていた精神世界が際立っており、ある種  
の畏怖まで他国に与えていたことが伺える。物質文  
明中心による、生活を便利にする器具を開発すると  
同時に、精神文明にも寄与する器具や「道」に似たし  
くみを考えていけないのではないか。先日、ドイツに  
行った際に、何気なく見たテレビで日本の「茶道」  
をやっていたのには驚いた。昨今、どうやら欧米で  
日本の「禅」や「茶道」や「武道」が随分と流行  
しているようだ。これは、日本が鎖国している間に  
物質文明の先駆者だった彼らが物質中心の社会に  
危機感を持ち始めているのではないかと想像する。  
もしかすると、日本が物質文明に溺れている間に、  
欧米が精神文明の開拓者となり、日本の「道」を発  
展進化させたシステムを作り出して、それをまた日本  
が輸入するという歴史を繰り返すことになるのかも  
知れない。楽しみでもあるがそうなる「灯台下暗し」  
で何とも残念でもある。

(ふじぶち わたる iPS細胞研究所教授 専門は  
生命情報科学)

## 栄誉

### 中村和弘学際融合教育研究推進センター准教授が日本学士院学術奨励賞を受賞

このたび、中村和弘学際融合教育研究推進センター准教授が日本学士院学術奨励賞を受賞され、授賞式が2月24日(火)に日本学士院で行われた。以下に同氏の略歴、業績等を紹介する。

中村准教授は、平成9年京都大学薬学部を卒業、同14年同大学大学院薬学研究科博士後期課程を修了し、同年薬学博士の学位を授与された。日本学術振興会特別研究員、米国オレゴン健康科学大学博士研究員を経て、平成21年に京都大学学際融合教育研究推進センター生命科学系キャリアパス形成ユニット特定助教に採用され、同25年に同講師、同26年に同准教授へ昇任となり、現在に至っている。

今回の受賞は、体温調節を含めた生体の温熱恒常性をつかさどる中枢神経機構の研究の成果が評価されたことによる。

人間を含めた恒温動物の体温の調節は多様な温度環境を生きる上で必須の生体機能である。同准教授は、生理学と解剖学の解析手法を多面的に駆使し、皮膚で感知した環境温度の情報を脳の体温調節中枢



へ伝達する神経経路を発見した。これは意識の上で温度を感じる仕組みとは異なり、無意識下での体温調節に必要な新規の温度感覚伝達経路であった。さらに、温度情報を受けた体温調節中枢が体温維持の生理反応を惹起させる指令を末梢の熱産生器官などへ伝達する神経回路を解明した。感染や心理ストレスを受けたときには、この神経回路が指令して発熱を惹起させることで生体防御に機能することも証明した。

生体の恒常性維持を担う脳の基本的な仕組みを解明したこれらの研究は国際的に高い評価を受けており、同准教授は平成26年に米国生理学会から若手研究者最高のBowditch賞を受賞した。今後、肥満や心因性発熱などの病態の克服に向けた医学的に重要な研究へ大きく発展することが期待されることから、今回の受賞の対象となったものであり、誠に喜ばしい。

(学際融合教育研究推進センター  
(生命科学系キャリアパス形成ユニット))

## 話題

### 日本学術振興会アジア研究教育拠点事業「リスク評価に基づくアジア型統合的流域管理のための研究教育拠点」第4回包括シンポジウムを開催

工学研究科を日本側拠点機関、マラヤ大学をマレーシア側拠点機関として実施している日本学術振興会(JSPS)アジア研究教育拠点事業の一環として、12月3日(水)、4日(木)に第4回包括シンポジウムをマレーシア工科大学(ジョホール・バル)にて開催した。

1日目午前中のオープニングセッションでは、Azlan Abdul Rahmanマレーシア工科大学副学長補の歓迎の挨拶にはじまり、日本側コーディネーターの清水芳久教授、マレーシア側コーディネーターのNik Sulaiman マラヤ大学教授からの挨拶および研究進捗状況の紹介、続いてDatuk Paduka (Dr.) Ir. Hj. Keizrul Abdullah マレーシア国際湿地連合事務局長



講演するNik教授

による基調講演が行われた。午後にはポスターセッション49件の発表に続き、2名による招待講演が行われた。またこの日はステークホルダーとの対話セッションが行われ、活発な議論が交わされた。

2日目はステークホルダーとともにブレイクアップセッションが行われ、メンバーがそれぞれ3流域(Selangor, Langat, Johor)に分かれて、現在までの研究の成果報告と今後の研究計画について具



体的な議論を進めた。

今回のクロージングセッションでは、平成25年秋に亡くなられた甲南大学の谷口文章先生を偲んで「谷口文章賞」が設けられ、生前のご活躍を紹介するスライドショーの上映と、受賞者への記念品の贈呈が行われた。

さらに、シンポジウム終了後は、ユーラシア大陸最南端の地、Tanjung PiaiとEM菌を使用しての浄化活動に取り組んでいるSungai Sebulongの二手に分かれ、視察を行った。



集合写真

(大学院工学研究科)

## 第7回次世代グローバルワークショップを開催

12月6日(土)から8日(月)までの間、第7回次世代グローバルワークショップを文学部新館2Fにおいて開催した。次世代グローバルワークショップは、グローバルCOEプログラムの活動を引き継ぎ、アジア研究教育ユニット(KUASU)が実施している事業であり、今回は「Care and Gender」をテーマに開催した。

世界の17大学(韓国、中国、台湾、フィリピン、インド、ネパール、シンガポール、カタール、マレーシア、フィンランド、フランス、ドイツ、英国、アメリカ)から合わせて19名の大学院生と若手研究者が参加し、本学および同志社大学の大学院生・若手研究者とともに英語で研究発表を行い、KUASUの国際連携大学の教員14名と本学の教員からアドバイスを受けた。また7人の教員および研究員による特別講義を実施した。

8日には、フィールドワークとして、市内の「高野川保育園」と日本ののちの花協会が運営する有料老人ホーム「北白川の花の家」を見学し、子どもたちや高齢者と交流体験をもった。「高野川保育園」では、



高野川保育園を見学する参加者たち

感想があった。「北白川の花の家」では認知症もある入居者と海外からの参加者とのコミュニケーション

はおおいに盛り上がり、職員の皆さんも驚かれたほどであった。

若い世代の参加者からは、「プレゼンテーション後に参加者からフィードバックをもらえる機会は、今後の研究の為に役に立つと思った。また、



「北白川の花の家」屋上にて



「北白川の花の家」にて入居者と交流する参加者たち

プログラムの一環として保育園や老人福祉施設への訪問が含まれていることも大変意義深い」、「国際的なネットワーク構築のために、このワークショップは最適な環境であると思う」、「自分の国を出て国際的なカンファレンスで発表をしたのは今回が初めてだったが、自信がついた。このような機会を与えてくれた京都大学に感謝したい」などの声が聞かれた。

参加者は今後もKyoto International Consortium for Asian Studies (KICAS)(京都アジア研究国際コンソーシアム)のウェブサイトを通じて交流を続け、単位互換や学生・研究員、教員の交換も視野に入れた国際連携の一層の発展を図ることを約束した。

本事業は大学の世界展開力強化事業「開かれた

ASEAN+6」による日本再発見 -SENDを核とした国際連携人材育成」およびスーパーグローバル大学創成支援(SGU)事業の一環として実施し、平成27年

度も継続して開催する予定である。

(学際融合教育研究推進センター)  
(アジア研究教育ユニット)

## 経済研究所シンポジウム「22世紀に向けた政策課題と大学の役割 京都からの発信」を開催

12月13日(土)、新・都ホテルにおいて、経済研究所シンポジウム「22世紀に向けた政策課題と大学の役割 京都からの発信」を開催した。

今回のシンポジウムでは、平成26年10月1日付けにて本学総長に就任した山極壽一 総長をはじめ、中央省庁において経済政策等に携わってこられた専門家など4名の方々が、22世紀に向けた政策課題、大学の役割について講演を行い、研究者、市民の方々など150名近い参加があった。

溝端佐登史 経済研究所長による開会の挨拶、先端政策分析研究センター(CAPS)の紹介の後、木下



会場の様子

康司 前財務省事務次官から「財政金融政策の軌跡と将来の展望」と題して、日本が財政金融政策における課題のトップランナーであり早期対応が重要であること、本東 信 国土交通省国土政策局長から「『国土のグランドデザイン2050』と新しい国土形成計画」と題して、対流促進型国土の形成についての講演があった。続いて、山極総長から「科学技術外交と大学の役割」と題して、科学技術外交の取り組みの重要性と「学びの場」としての本学の取り組みについて、



山極総長による講演

最後に藤田昌久 経済研究所特任教授・経済産業研究所(RIETI)所長から「グローバル化と知識創造時代における政策課題」と題して、知識創造社会における多様性のあり方と今後の政策対応の方向性について講演が行われ、津田敏隆 生存圏研究所長による閉会の挨拶でシンポジウムは盛会のうちに終了した。

(経済研究所)

## 京都大学・日本財団森里海シンポジウム開催

12月14日(日)に、京都大学・日本財団森里海シンポジウム「人と自然のつながり」を育てる地域の力ー淡海(おうみ)発・企業の挑戦ー」を、キャンパスプラザ京都において開催した。今回の森里海シンポジウムでは、琵琶湖を抱える環境先進県と言われる滋賀県を舞台に、環境マネジメントや地域振興に取り組む企業の取り組みを報告いただいた。

基調講演では、嘉田由紀子 前滋賀県知事による、研究者や知事として琵琶湖辺の環境や人々の暮らし

と関わる中でどのようなことを考え、どのような取り組みをしてきたかについての基調講演があり、環境共生、生活環境主義、ふれあい価値など、自然と人の暮らしやつながりを重視されてきたことがとても明確に感じられる内容であった。

続いて、滋賀県の企業から、株式会社たねや農藝の讃岐和幸 北之庄菜園長、株式会社コクヨ工業滋賀の前田賢一 代表取締役社長、滋賀銀行の辰巳勝則 総合企画部CSR室長によるそれぞれの取り組み



について講演があった。讃岐園長からは、甲子園三つ分の新しい敷地を「人々の集まる森のお菓子屋さん」とするべく取り組んでいる“森を作り里を作る”活動について、前田取締役社長からは、びわ湖・淀川水系のヨシを原材料の一部として使用した【ReEDEN】シリーズの開発・製造・販売にまつわる話や有志数人から始めたヨシ刈り活動の拡がりについて、辰巳室長からは、「環境格付」を通した企業の環境配慮の取り組みの促進やさまざまなつながりを創出する「環境コミュニケーション」の取り組みについての紹介があった。

次に、森里海連環学からみる淡海の企業の挑戦と題して、「環境ガバナンス・地域振興」(吉積巳貴 森里海連環学教育ユニット特定准教授)、「企業活動と環境」(吉野 章 地球環境学堂准教授)、「森林・里山環境」(柴田昌三 地球環境学堂教授)の各視点から3企業の取り組みについて解説を行い、清水夏樹 森里海連環学教育ユニット特定准教授のコーディネートでパネルディスカッション「森里海連環を通じた“ものづくり”“ひとづくり”“地域づくり”」を行った。パネルディスカッションでは、滋賀県では



パネルディスカッションの様子

琵琶湖を抱える以外にも宗教的要素などの文化背景も地域や人のつながりを支えていること、企業の環境に対する取り組みを継続させるために必要なこと、地域とのネットワークの作り方などについて意見が交わされた。嘉田前知事からは、研究者や学者は政治に背を向けないでほしいという願いと女性の社会進出と感性への期待が述べられた。

師走の忙しい時期にも関わらず、150名を超える参加があり、参加者から寄せられた意見により充実したパネルディスカッションになった。

( 学際融合教育研究センター  
(森里海連環学教育ユニット)

## 訃報

このたび、<sup>み やけ こう ぞう</sup>三宅弘三名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同氏の略歴、業績等を紹介いたします。

### 三宅 弘三 名誉教授



三宅弘三先生は、12月15日逝去された。享年86。

先生は昭和26年3月京都大学理学部を卒業後、同大学院に同31年5月まで在籍、同年6月に同大学化学研究所助手に採用され、同年9月より同36年2月までアメリカ合衆国ロチェスター大学大学院に在学し、同年7月にはロチェスター大学からPh.Dの学位を授与された。さらに、昭和37年3月には京都大学理学博士の学位を授与された。昭和39年7月理学部助教授、同48年10月教授に昇任され、平成3年3月に停年により退官されるまで、高エネルギー講座を担当され、同年4月に京都大学名誉教

授の称号を授与された。また、高エネルギー物理学研究所の運営協議員等を歴任された。

先生は、日本における素粒子物理学の黎明期に本学の高エネルギーグループを結成、その後の日本の素粒子物理学興隆に貢献された。その業績は、電子シンクロトロンや陽子シンクロトロンを用いた核子共鳴の解明とクォーク模型の構築、アメリカ合衆国フェルミ国立研究所におけるアップシロン共鳴実験に関する国際共同実験の遂行、トリスタン電子・陽電子衝突型加速器を用いた電弱統一理論や量子色力学の検証など多岐にわたり、日本の高エネルギー素粒子物理学の発展に尽力された。

(大学院理学研究科)